

△書 評▽

白山芳太郎著『北畠親房の研究』（ベリかん社・平成三年）

新 川 哲 雄

本書は、既に『職原鈔の基礎的研究』（神道史学会・昭和五十五年）を出版され、北畠親房の研究者として知られる白山芳太郎氏の新著であり、これまで『季刊日本思想史』『日本思想史学』『神道史研究』などに発表された十一の論文をもとに、一書にまとめられたものである。が、単に既発表論文を集めて一書としたものではない。

本書は、白山氏自身が「まえがき」で述べているように、北畠親房の思想の基盤を考察するという統一の観点から編まれ、彼の前半生の基礎的教養が儒教にありながらも、その思想基盤が結局のところ神道にあることと、中世神道史における彼の役割について検討したものである。それが可能であったのは、研究者に当然の如く求められていながら実際にはなかなか困難な課題、一貫して立てられたテーマに従って継続的に研究することを、氏が堅実に続けてこられたからに他ならない。

その一貫した白山氏の研究テーマとは、親房の神道観の究明にあると言えよう。氏は、「北畠親房の神道観の特色は、自然崇拜の神

祇信仰をつきつめて考えて、水を飲み稲のたねを食べるのも皇恩だとし、窮極のところ、神道にもとづいた天皇の政治を理想とする一つの国家構想にまで発展させているところにある」とした上で、そうであれば「北畠親房の描いた具体的な国家構想をまず明らかにし、それと不離一体のものとしての北畠親房の神道思想の分析へと、解き開いていく研究過程が予想されるのではなからうか」と述べている（『職原鈔の基礎的研究』はしがき）。

そして、『職原鈔の基礎的研究』が白山氏の言葉によれば「上記第一段階の解明について、その基礎を明らかにしようとしたもの」であるとすれば、本書『北畠親房の研究』はそれに続く親房の神道思想分析への手続きとして、冒頭にも述べたように親房の思想の基盤が神道にあることを明かさんとした著作と、位置づけることができよう。この着実な一貫した研究の進展過程に、研究者としての誠実な白山氏の態度を見ることができきる。

以上のような課題をもった本書は、四章と補論で構成されている。以下、各章ごとに本書の論考の内容を見ていくことにする。

二

本書を通読して感じられる第一のことは、白山氏の論考のどれもが、広範囲にわたる関係史料に丹念に目を通され、厳密なテキストクリティックのもとに手堅い解釈を積み重ねて、そこから論旨を導き結論されていることである。その結果、提示された結論はいづれも確固として我々の前に据えられているように思われる。それも氏の正統な研究態度からおのづと導かれた得難いものであろう。

このことは、本書の第一章「北畠親房の思想的基盤」を見ても端的に知られることである。

その第一節は親房の和歌に関する思想を問題にしている。初めに、親房が和歌について「コレヲヨクセバ僻ヲヤメ邪ヲフセグヲシヘナルベシ。カカレバ、イヅレカ心ノ源ヲアキラメ正ニカヘル術ナカラム」(『神皇正統記』嵯峨天皇条)と説いていることを指摘し、もつて後村上天皇や親王に対し詩歌の学的重要性を説いて奨励せんとしたものである。和歌の学びを政道の助けにせんとする意図が、親房の和歌に対する態度に認められるのだという。次いで、親房作の和歌を主として『李花集』から紹介し、その作品には自然愛好の思想とともに尊皇思想が見られるとしている。さらに『古今集註』を取り上げ、ここでは深津睦夫氏の論文をふまえながら、和歌を後村上天皇や親王の政治学上の重要修得科目とする親房の主張の意図が、その政治に和歌の道を活かすようにとの進言であったとする。

第二節は、本誌『日本思想史学』十七号に掲載された論考で筆者も興味深く読ませて頂いたものである。それ故、内容については改

めて紹介するまでもないと思うが、この論考で氏が指摘された点はいづれも示唆深いものであった。

まず、その著作『二十一社記』と『神皇正統記』をふまえて「親房における神道信仰は神の恩ということ」を、中心においた信仰である」とする点である。即ち「カシハ井ノ水ヲ飲モ、稲穂ヲ食モ神体ニハ非ズヤ、神恩ニハ非ズヤ」(『二十一社記』)として神恩に感謝して生きることが人の道と説くことが、親房の神道信仰の核であるとする指摘は興味深い。白山氏は「親房における神道信仰は、根源を神話にもとめ、神話によって知った神徳・神恩に対して感謝しようとするもの」と述べているが、それは、親房が神話に立脚して彼の神道信仰の核心に触れた時、彼が神祇信仰の基層に潜んでいる自然崇拜に根ざすプリミティブな神観にまで触れ込んでいたことへの重要な指摘であろう。が、だからこそ一層、氏が先の引用文に続けて「朝夕ニ長田狭田ノ稲ノタネヲクフモ皇恩也。昼夜ニ生井栄井ノ水ノナガレヲ飲モ神徳也」(『神皇正統記』)と引用するのであれば、そこで「神恩」の語を「皇恩」の語に言い換えている親房の独自の立場、即ち天孫降臨神話に立脚して天皇の神孫たることを直ちに承認する立場について明確に指摘した上で、改めて断る意識もなく神恩と皇恩を自明のように同意に見做さんとする親房の独自の政治的立場を、明確にして欲しかったように思う。勿論、氏は同箇所より少し後で、そこにある「皇恩」は「天皇の恩の意味であるが、事実上は皇祖神の恩、即ち天照大神の恩ということ」と述べておられるが、正にそう説くところに親房の独自の政治的立場があると筆者は考えるのである。

それにも拘らず親房の神観には、白山氏の重要な指摘のように「惣テハ一塵一物モ神ナラズト云事無キ也。手足ニモ触レ耳目ニモ当ラム時ハ、是神也ト知テ可敬レ之」（『二十一社記』）という面があることを、彼の神道信仰において忘れてはならぬと思う。言わば、親房は日本の神祇信仰の核心をその言葉で正確に理解しているのである。白山氏のこの論考は、その点を明確に指摘しておられる。

三

第二章「北畠親房における歴史研究と官職研究」において、白山氏は親房の主要著作から主として『神皇正統記』と『職原鈔』を取り上げ検討を加えている。即ち、第一節は『神皇正統記』の歴史思想について、第二節は『職原鈔』の内容と書名について、第三節は両書にもとづいて親房の摂政関白観について考察した論考である。

この時、従来の研究とは異なる白山氏の研究の立場は、例えば『正統記』の歴史思想について論じる場合、『正統記』のみでなく、著作の総体、少なくとも官職研究・神道研究の著作における関連発言にも留意して行われる必要があった（本書、三十八頁）と述べておられるように、親房の著作全体との関連から一文・一句を解釈し立論せんとするもので、正当で手堅いしかも手間の掛る仕事を、めざしているのである。氏がこのような立場をとられるのも、親房の主要著作が密接な関連のもとに著述された、即ち『神皇正統記』は現実の政務への参考として、『職原鈔』は現実の官職補任への参考として、『二十一社記』は神社の事を尋ねられた際の答えとして、いづれも後村上天皇を著述対象として執筆し献上したもの（第一章

第一節）であって、その意味で特に前二者は「姉妹関係にある著作」（第二章第一節）と見ているからである。

それ故、白山氏が『神皇正統記』の歴史思想の検討に際し、同書が用いる上古・中古・近代という時代区分に基づき親房の歴史認識を分析しようとする時、「現実の政務への参考意見を、『正統記』と『職原鈔』を通じて提示しようとしたという親房理解の上に立つて、上古・中古・近代の時代区分における個々の論点を見直さなければならぬ」という主張をなすのである。この立場で論点を『正統記』から取上げ『職原鈔』の記述を参照しながら検討し、氏が得られた結論は、従来説かれていた、摂関政治の中古のみを理想時代と考える懐古趣味な歴史思想が親房に見られるという説が、「親房の著作の総体よりみていく時、否定せざるを得ない。むしろ、現世を肯定的に見る前向きな積極的姿勢が親房の歴史思想の特色」（本書、五十頁）という示唆に富んだものである。また『正統記』についても、全体の六割にも及ぶ近代の記載に親房の主張の重要な力点が置かれているとし、近代において朝廷は、藤原氏は、村上源氏は、そして武士はどうあるべきか、等を説くのが同書における中心課題であった（同、五十一頁）と、十分に首肯しうる見解を記している。

続く第二節では『職原鈔』の内容を簡単にまとめた上で、多くを書名をめぐる考察にあてている。同書は、摂関政治を否定し武家政治をも否定し、終始、各官職の初例・任官来歴・職分を述べて各官職の本質について考察材料を提供し、もって百官すべて天皇から与えられる官職だと明かすものであり、したがって、同書に親房の国家構想、ことに政務機構面での具体的構想が集約されている（同、

六十頁）と、氏の基本的見解を述べている。

書名に関しても簡潔に「本来特定の書名がなく、『親房卿記』、もしくは、書き出しの見出しを採って『百官』と呼ばれていたものがあり、『職原鈔』（または『職原抄』）は後人の命名と推定」（同、七十三頁）と述べているが、この結論を導くために白山氏は同書の現存諸本についてその書題を検討した上で、さらに後世に他の著作の中で引用された書名の表記に注目して書名表記の不一致を指摘され、上記の推定を明らかにしているのである。また、同書がどのような経過で『職原鈔』と呼ばれるようになるかについても、丹念な考証をなしておられる。

このような研究は一見、思想史研究にとって末梢的部分のように思われ軽視されがちであるが、むしろどの思想家についても厳密な基礎的研究の上に思想内容の検討がなされるべきであることを、氏の研究を拝見しながら改めて教えられた思いである。白山氏は『職原鈔の基礎的研究』において詳細な同書の諸写本と版本の系統とその原型の検討をなされているが、それを踏まえられた書名をめぐる検討に氏の正統な研究方法を見るのである。

第三節は、両書をもとに親房の撰関についての基本的な考えを検討したものである。慈円の『愚管抄』と対比しながら、延喜・天曆における醍醐・村上天皇の治政を親房が高く評価していること、さらに宇多天皇の治政を兩代を導いた基盤として評価し、同天皇から中古として区分する彼独自の立場を紹介している。親房はこの三代の再現として、後宇多・後醍醐・後村上天皇の三代を考えて後村上天皇の治政に期待したのだと説く（同、八十七頁）。その主張から、

当然の如く首肯される親房の撰関白観、即ち撰関の存在は認めるが、どこまでも天皇の補佐の臣であるとの立場から撰関家の行きすぎた専権には批判的な見方を指摘して、本節を終えている。

四

第三章「北畠親房の神社研究」、特に第二節と第三節の『二十一社記』に関する検討は、本書の中で最も優れた論考であると思う。

まず第一節で親房の伊勢・熱田・三輪における敬神の特徴を「敬神勤王」（本書、百二頁）と要約した上で、第二節は『二十一社記』成立の意義、第三節は『二十一社記』における伊勢神道の影響を論じている。いづれも白山氏の堅実な研究態度の成果として、今後の親房研究の基礎となるものと確信する。

第二節では、冒頭に従来の『二十一社記』研究を紹介し、その成立をめぐる問題が『二十二社本縁』との関係から検討されてきたことを明かして、論考の課題を、第一に諸書との前後関係の考察、第二に同書の果たした役割から成立の意義を把握することだとする。

第一の点については『二十一社記』が『二十二社本縁』に先立ち、後者が親房の著作ではないこと、両者を初稿本・再稿本の関係で考えられぬことだと結論する（本書、百十二頁）。小気味よい推論であり、十分に納得しうる史料考証に裏づけられている。第二の点については、複数の神社群に関する最初の研究文献であり、朝廷の実務において頻出する神社関係行政の参考文献として成立の意義をもったと明快に述べる（同、百十九頁）。

第三節に、『二十一社記』の検討を通じて第一に親房と伊勢神道

との関係への再検討、第二に後世への影響という側面から伊勢神道の本質を問うことを課題としている。

まず、第一の点については、親房が学んだ伊勢神道書を持つ外宮祭神と同格にせんとすることに親房が批判的であった事実を指摘し（同、百二十一頁）、それを『二十一社記』の記述をふまえて論ずるのである。当然この問題は、直ちに『宝基本記』や『倭姫命世記』をはじめとする所謂神道五部書の成立、即ち成立年代や作者をめぐる困難な問題に関係してゆく。それを白山氏は『宝基本記』の内宮祠官荒木田氏良奥書を信じる立場から同書の奥書を慎重な手続きで検討し、それが度会氏の手に渡った過程を推論して見せ（同、百二十六―七頁）、「伊勢神道は永仁の皇字争訟直前や、文永の内宮遷宮時や、弘安文永の蒙古襲来の祈禱の過程の、いずれというのではなく、いずれの時期にも加上されつつ、現伝本に見られる思想的内容が形成された」という示唆深い指摘をなしている。その上で、伊勢神道書に見られる神道思想の特色を清浄・正直・元元本の三つと捉え、それが表現を変えつつ最も多く広く強調されていると説き、それが皆親房の思想に継承されていることを『神皇正統記』の記述を挙げて論証している（同、百二十九―三十一頁）。

第二点については、伊勢神道説からの親房の新しい展開として、既に第一章第二節で論じられた『二十一社記』にみえる神観、即ち日月の光や雨もりにも神が存し、米も水も全て神恩とみる『伊勢神道』になかった思想が親房によって追加された、と述べている（同、百三十三頁）。白山氏がここで『伊勢神道』と表記しているのは神道五部書のことであらう。その特徴的な神観を踏まえて人の道が説

かれるところに、親房の神道思想の特色があるという興味深い指摘である。

五

第四章「中世神道史における北畠親房の位置」も三節からなる。

第一節は親房の天照大神観を検討することにより、中世神道史に彼を位置付けんとする論考である。まず、前章第三節で指摘した、外宮祭神を内宮祭神と同格にせんとする外宮側の説に批判的な親房の態度を挙げ、彼の著作における両祭神に対する表記は非常に注意深いものになっており、皇の字は内宮にのみ用いられているという。そしてこの点から、伊勢神道における『宝基本記』『倭姫命世記』『神祇譜伝図記』の成立の問題に触れ込みながら、それらの書の祖型には外宮祭神にいづれも皇の字がなかったという推定を導かれ、それが外宮側によって付け加えられていく動向を指摘している。

その上で白山氏は、上述の伊勢神道の動向からして親房を不用意に伊勢神道を伝えた人とするのは誤りであり（同、百五十四頁）、親房が外宮祭神を尊貴たらしめんとする伊勢神道の枝葉説を否定しつつ、その根幹を継承して天照大神観を樹立することを『神皇正統記』をふまえて指摘している。即ち、伊勢神道を継承し発展させた新段階の親房の天照大神観とは、我々は天照大神の御田の稲穂と与えられた水とにより生かされているのであり、だからこそ我国は神国であるのだから、神道に違いては一日も日月を頂くことができないとして、天照大神を祭ることの意義を皇室だけでなく全国民に応用できる神学思想の段階へと進め、「天照大神奉仕の精神こそが諸

事に通じる精神だとする神学思想を樹立」したものと、白山氏は論じている（同、百六十頁）。これは親房の思想の核心が敬神尊王であったことを指摘したものに他ならない。

第二節は前節同様、親房の神道思想と伊勢神道との関わり、とくに神国思想・天壤無窮の神勅による国家観・仏教に対する態度を問題にしている。いづれも『倭姫命世記』に見られるものだが、前二者は、直接の影響かどうか断定できないものの、親房に伊勢神道同様の考えが認められ、仏教に対する態度においては、それが神宮奉仕の伝統的禁忌であることからすれば、親房と伊勢神道との間に差異があり、彼は排仏の立場を取らず仏教に限らず興し用いることを説いているという。また先にふれた外宮の皇字問題に批判的なことから、親房が伊勢神道書に書かれているものを盲目的に受容したのではない（同、百六十六頁）が、同時に前章第三節で既に論じられた伊勢神道説の核心、正直・清浄・元元本本を親房が受容していることから、伊勢神道説を彼が正しく受容し「現実の度会家行ら外宮祠官との世俗的関係によって筆が左右されていない」（同、百七十頁）と評価している。即ち、伊勢神道の根幹的思想を継承し発展させたものが親房の思想とするのが、白山氏の結論である。以下に伊勢神道とは異なる親房独自の展開を挙げているが、これ迄の論の再論である。既論文の再編集であれば当然起こることであり問題にすべき点ではないが、この親房独自の神道観を明らかにすることを白山氏はその課題としておられるのであろう。

第三節は中世神道史における北畠親房の位置について、両部神道・山王神道・伊勢神道及び吉田神道との関係から考察した論考で、

『神皇正統記』の流布が中世思想への伊勢神道説の根幹的部分の二次的な影響の媒体となったことを、前節同様その神国思想・天壤無窮の神勅による国家観・仏教に対する態度の検討から指摘するものである。

それに続く補論は「中世宗教運動と伊勢神道発生」と題し、伊勢神道と鎌倉新旧の仏教との対比から中世における宗教運動の創始者について検討しつつ、伊勢神道成立の過程を考察するものである。そして成立の契機を、蒙古襲来により昂揚した神国思想の流行であると、神国思想の経緯に触れ、当時の中央の宗教人と伊勢との接触を指摘している。

六

以上、各章毎に白山氏の論考を見てきたが、本書は示唆的な新見を多くもち、今後の北畠研究にとって参照すべき論考であることに間違いない。それだけに今後も白山氏から我々に是非ご教示頂きたい点を挙げて結びとしたい。

それは北畠親房の思想を全体としてどう捉えるかという問題である。もう少し言えば、例えば彼の仏教思想と神道思想がどのような関わりを持つのか、『神皇正統記』を貫く親房の仏教理解、あるいはその著作『真言内證義』の内容と、彼の敬神尊王思想とがどう結びつくのか、これについても本書の論考同様明快にお教え頂きたいと願うものである。

そしてこの問題は、当然の如く中世神道思想史への親房の位置付けにとどまらず、氏が補論で試みられたように日本中世思想史さら

には日本思想史全体への位置付けの問題を検討することに通じていくであろう。我々日本思想史研究者にとつて興味深い問題について白山氏のお考えを伺える時を待ちたいと思う。何故ならば、新しい世紀を迎えようとしている今、何故北畠研究なのかこそが、最も問わねばならない問であり、語られねばならぬことではないかと考えるからである。

いずれにしても、多くの新見に満ちた白山氏の優れた北畠親房研究は、今後の研究を導く基本文献として高く評価されるべきである。

(学習院大学教授)